



第44回医学展を終えて

医学展実行委員会

6月4日、5日と2日間にわたり開催いたしました医学展には例年を上回るほどの大勢の方々がお越しください、大盛況がありました。様々な企画や展示、講習会などを通してご来場いただいた方々との交流の機会が持てたことをうれしく思います。また、医学展を通して色々な事を学べたと共に、北大祭の一学部祭として十分に医学部の存在をアピールできたと感じています。学生が主体的に活動できる、より素敵な北海道大学にまた一步近づいたのではないでしょか？このように感じができるのも、ご来場くださった方々を始め、参加していただいた団体の方々、同窓会の先輩方、教室の先生方、学生の皆さんなど、様々な形で医学展を支えてくださった皆様のおかげであります。本当にありがとうございました。

文責 金 崇豪

《市民と医学生による検査体験会》

来場していただいた市民の方に、さまざまな臨床検査を体験していただくという通称「市民検」は、北大医学展に毎年「これが楽しみ」といって来てくださる方がいらっしゃる伝統的な企画です。

検査は全部で7部門。問診、眼科、神経内科、エコー、心電図、呼吸器というおなじみの部門に加え、今年は「代謝関連」という新部門で骨密度や動脈硬化度などを

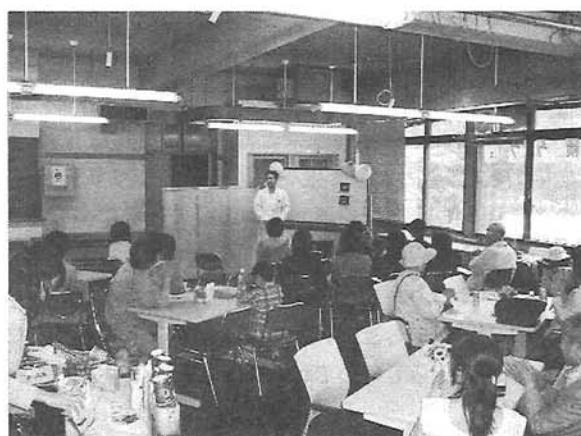
測定。また、今年は来場者に、検査や健康についての勉強や、医学生とのコミュニケーションをしてもらえるようになると「市民検カフェ」という新企画を導入しました。各部門がカフェでのミニレクチャーをしたことや、協賛企業のご協力もあって、より楽しめる市民検にできたのではないかと思っています。



伝統企画・新企画とも、スタッフみんなが生き生きと取り組んだこと也有って、今年は1200名という（記録的な？）入場者を迎えるました。アンケートにも、「医学生が優しく丁寧で楽しかった」「たいへん勉強になった」「学祭の中で一番面白かった」「来年もぜひ来たいです」といった、感謝のコメントが多く、「子供（小学生）も医学部に入ってお兄さん・お姉さんのようにかっこよくなりたいと言っています」「熱意と誠実を感じました。是非よいお医者さんになってください」と書いてくださった方もおられました。

課題としては、入場者数が多く、お待ちいただいた方が多かったことから、もっと待ち時間を減らす工夫ができればさらによかったこと、などがあったかと思っています。

この「市民検」はいくつかの部門からなる大所帯の企





画であり、また医学展の一企画として実に多くの人に助けていただきながら実行することができました。

普段の医学生の生活とは一味違う形でのチームワークを發揮し、市民に明るく親切に接するスタッフの姿に、深い感動を受けたのは私だけだったでしょうか。みんなの力で成功させることができたことに感謝しつつ、今年の報告としたいと思います。来年も是非よい市民検を！

文責 林 幹浩

《講演会》

企画部門では、毎年講演会にて著名な方をお招きし、その年のテーマに沿った講演をして頂いています。

2005年（今年）は次の3つの講演を行いました。

- ・ 公開市民講座 「生活習慣病について知ろう！」
- ・ 講演会 「三浦雄一郎の〈元気力〉～70歳、エベレスト登頂」
- ・ 義家弘介氏講演会 「ヤンキー新たなる挑戦！」



現役プロスキーヤーの三浦雄一郎先生・『ヤンキー先生成校に生きる』著者の義家弘介先生を招いて、医学展を通して参加者に夢と勇気・希望を抱いてもらうことを目的とした講演を行いました。両講演とも、笑う人あり・涙する人ありで、来場者全員が心から楽しめる講演会になったのではないかと思います。

また、『生活習慣病について知ろう』と題しまして、

北大・北海道医療大から生活習慣病のプロフェッショナルの先生方をお招きして、公開市民講座を行いました。これにより、とても身近な病気でありながら、なかなか詳しく知る機会のない生活習慣病の予防と対策を多くの方に学んでいただけたのではないか、と考えています。

さらに、今年初の試みとして、北大病院の入院患者さんにも元気になっていただこうと、北大病院医療情報部・看護部のご協力の下、病室の各ベッドに備え付けてあるテレビでも講演会を無料で視聴できるようにしました。この試みは非常に好評を頂き、私たち医学生に求められていることは何か、ということを実感し、またほんの少しではありますが実現できたように思います。来年度以降もぜひ後輩たちには続けていってほしいと思います。

この場を借りて北大病院医療情報部・看護部の皆様に御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

《献血》

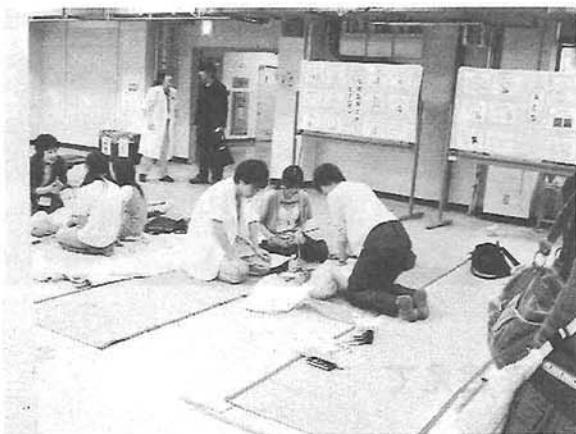
2004年度から企画部門の企画の一つとして、北海道赤十字血液センターのご協力による献血を行っています。2005年（今年）は6月4日（土）に、医学部ロータリーにて行いました。テーマを『献血は“身近なボランティア”・“愛の贈り物”』と題し、献血は市民の方々の善意・愛であり、多くの人の命を救っているのだと盛大にアピールしました。

また、今年は特にクロイツフェルトヤコブ病などの関係から、献血制限が厳しくなり血液量不足が叫ばれる中での献血であり、医学展を訪れる市民の方々に献血に協力してもらえるかどうか非常に不安を伴うものでした。しかし、最終的に今年の成果としては、受付数188名・献血協力数129名と2004年度を上回るものになりました。この医学展という機会を通じて、市民の皆様に少しでも献血の重要性を訴えることができたのではないかと考えています。このように、今後も医学生の私たちが、医学展を通じ、少しでも社会貢献につながるような事をできたら本当に素晴らしいのではないかと思います。

文責 渡辺美佳

《医学展救急部門》

今回の医学展救急部門では新しく4つのことに取り組みました。1つは阪神大震災から10年という節目であり、そして昨年には新潟県中越地震が起きたことから、札幌市危機管理対策室にパネルを拝借し、災害医療について展示を行いました。また2つ目には、昨年の夏から一般の方にも使用を認められたAED（自動体外式除細動器）を用いて一次救命処置の体験会を行いました。そして3つ目は、三角巾を使ってさまざまな怪我の応急処置の体験会を行いました。さらに4つ目として、札幌北消防署の救急救命士の方にインタービューを行い、それをビデオで上映しました。昨年と同様、外科医体験、救急医療器具展示も行いました。



今年多くの方にご来場いただきました。心肺蘇生法や三角巾を用いた応急処置を習得しようと頑張ってらっしゃるご年配の方の横では、外科医の格好をしてうれしそうにピースをしている小学生達がいたり、救急医療器具を手に持つてしかめ面をしている大学生がいたりと、様々な方々に楽しんでいただけたと思います。



意外と好評だったのが、三角巾の結び方でした。本結びの、固い結び目を簡単にほどく方法を教えると、まるで狐につままれたような顔で「ほお～」と感動なさる方が多かったです。また「これは三角巾でなくとも、普通のロープ結びに使える」という声が多く返っていました。

今年は1年生から5年生までの27名にスタッフとして手伝ってもらいました。皆、とても頼もしかったです。三角巾の使い方、一次救命処置の方法を夜遅くまで頑張って勉強、練習していました。自主的に札幌市民防災センターに行って、救急救命の講習会を受けてくれた人もたくさんいました。この調子で来年の医学展救急部門を頑張ってほしいな、と勝手ながら思っています。

医学展を通して、一般の方々がいかに医学に関心を持っているいらっしゃるかを実感しました。また、少しではありますが、それに応えられたことをうれしく思います。



最後になりましたが、今年の救急部門の成功は北大病院救急部、札幌北消防署、札幌市危機管理対策室、札幌市民防災センターのご協力があってこそだと思っております。この場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

文責 細井 邦彦

《高齢者・妊婦・車椅子体験会》

毎年、体験会には子どもから大人までたくさんの方々が参加してくださいます。今年も、ふたりそろって高齢者体験をしていくご夫婦や、ちょっぴり恥ずかしそうに妊婦体験をしていくお兄さん、初めて乗る車椅子に瞳を輝かせる子どもたちなど多くの方々がご来場ください、ときには順番待ちができるほどの盛況ぶりでした。

体験会に参加してくださった皆さん、人によってそれぞれどんなことに不便を感じるのかが異なることに気づいたり、サポートが必要とされる場面ではどのようにすればよいのかを学んでいってくださったのならうれしいです。

体験会は総勢30名のスタッフで市民の皆さんをお迎えしました。普段の大学生活ではなかなか見ることができないスタッフ的一面を垣間見ることができたのも楽しみのひとつでした。いつの間にか子供たちに懐かれている同級生に驚き、心のこもった対応をする後輩の姿に感動し、温かな雰囲気をつくりだしてくれたスタッフに感謝した2日間でした。

この体験会に参加・協力してくださった皆様、ありがとうございました。

《盲導犬デモンストレーション》

今年も、北海道盲導犬協会からPR犬ジャーム君と訓練士さんが来てくださいました。

ジャーム君のかわいらしさに釘づけになる子供たち。たくさんの子供たちに見つめられてそわそわしだすジャーム君。終始、和やかな雰囲気で会は進められていきました。

訓練士さんから盲導犬の一生やお仕事についてのお話があったり、実際に目隠しをして盲導犬と一緒に歩く体

験会があったりと、楽しながら多くのことを学んでいただけたと思います。また、募金活動にもたくさんの方々がご協力くださいました。

私たちスタッフも、ジャーム君との出会いを通して良い勉強をさせていただきました。ジャーム君、本当に疲れ様でした。

盲導犬への理解が広がっていくことを願っています。皆さんも協力してくださいね。文責 吉田美穂



第55回医系大運動会を終えて

実行委員長 医学科3年 星野 傑

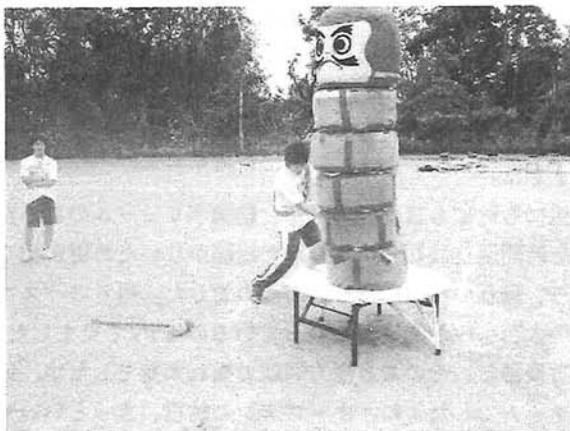


6月18日(土)、実行委員の一年生による選手宣誓によって第55回医系大運動会が開催されました。今年は例年の金曜日から土曜日に変更になり、またグランドの都合で午後開催ということもあり無事開催できるか不安でしたが、みんなの協力もあって、快晴の中はじめることができました。

競技は玉入れや綱引き、騎馬戦などまさに運動会といった感じの競技から成り立ち、参加者を四色にわけ、色対抗で競い合います。はじめは恥ずかしがっていた学生た

ちも次第に熱くなっていき、気がついたらみな一生懸命になって競技に取り組んでいました。特に盛りあがった競技としてはだるま落としやフォークダンスなどが挙げられます。だるま落としは本間先生も学生にまじってチャレンジされ、おおいに盛り上りました。フォークダンスは音楽にのって踊りながら楽しくできました。また運動会のメインイベントであるリレーはクラブ対抗、医局・教職員対抗、チーム対抗の三つのリレーがあり、クラブ対抗リレーは主に運動部の学生たちが競い合い、各部活とも接戦でした。医局・教職員リレーは第一生理学教室の本間先生や第一薬学教室の吉岡先生、法医学教室の寺沢先生がアンカーとして走られ、他は学生が各チームに入って競い合いました。各競技盛り上がって、楽しく行うことができ、運動会も無事終えることができました。

今年は様々な変更点があり、みな参加してくれるのが一番不安でした。土曜日ということもありクラブ活動などで参加出来なかった学生も多数いて参加者は例年より少なかったのは残念ですが、わきあいあいと出来たと思います。今年参加できなかった学生や教職員の方々、是非来年こそ参加してみてください。私たち実行委員も運動会がもっと多くの人に楽しんでもらえるようにもっ



と盛り上げていきたいです。

最後になりましたがこの運動会のためにご支援してくださった医学部学友会・同窓会、医短学友会、各医局、様々なアドバイスや協力を下さった教務の皆さん、当日運動会のお手伝いをしてくれたみんな、参加してくれた学生、本当にありがとうございました。今後も私たち医系大運動会実行委員は新しいアイディアを持ち寄り、工夫を凝らして盛り上げていきたいと思います。今後も医系大運動会が発展していきますよう、ご支援やご協力のほど宜しくお願い致します。

第9回医学部学生教育ワークショップ報告

北海道大学病院小児科 窪田 満

第9回北海道大学医学部学生教育ワークショップが、平成17年8月19日(金)、20日(土)に樺戸郡月形町「はな工房」で開催されました。参加者は教員が本間研究科長以下21名(世話人グループ以外は4~5人のグループ3つに別れました)、事務員が2名でした。参加した皆様、お疲れ様でした。でも予想以上に楽しかったですね。去年より人数が少なかったそうですけど、参加していない講座は絶対損しましたね。来年は是非、参加した方がいいですよ、本当に。

うーん、でも何というか、私個人としては「ついてない2日間」でしたね。ワークショップのグループ内役割決めでは、結局一度もジャンケンに勝つことなく、リーダーと発表者をやりましたし、夜のほろ酔いディベートでもクジ運悪く、一番楽そうな「ジャッジ」を引けませんでしたし、最後にFDの感想文を書くように前沢教授に指名されてしまいましたし。でも、何よりも良かったのは、色々な先生とお話をできたことです。私は北大出身で、臨床医です。でも、他大学を経験されている先生、基礎の先生も参加されており、夜の宴会では北大の学生や病院の臨床医に対して大変厳しい御指摘を受け、勉強になりました。例えば、北大の学生や研修医は挨拶をしない。そうだよなー。また、あまりにも安易に医学博士が取れているのではないかという指摘。うーん。最初のアイスブレーキングの「グループ名付け」では少しきちなかつたのですが、最後はここまで熱いディスカッションができるまでになりました。

さて、本題のワークショップですが、1日目のテーマは「医学英語」でした。「医学英語」は必要か? 3つのグループに共通するのは「英語」「英会話」は必要だけど、ことさら「医学英語」という形で講義するのはどう

かという意見でした。確かに論文を読む力、テクニカル・タームを操る力は重要ですが、それは「医学英語」という講義ではなく、臨床実習を含む教育の中で教えていけばいいという意見が多かったと思います。各臨床実習のレポートを英語で書かせるなどの厳しい案も出されました(それを読む方も大変だよなー)。でも、今本当に必要なのは「英会話力を含む英語力」であり、北大病院で留学生などの外国の患者さんを診察する機会も多い私たちはそれを痛感しています。また国際学会でも、自分の意見を伝えきれずにつらい思いをすることがあります。しかし、だからこそ英語教育をしっかり行えば、それが北大医学部の特徴(セールスポイント)に繋がるとも言えます。北海道大学の基本理念は1. フロンティア精神、2. 国際性、3. 全人教育、4. 実学の重視だそうです。英語教育はそれにぴったりのものであり、何とかいい教育を北大の医学部生に受けてもらい、世界に通用する英語を身につけてもらいたいものだと、心底思いました。

ただ、グループによって個性があって面白い。私たちのグループは「英会話教室と契約してその試験をクリアしてもらうのを単位とする」でしたが、「そこまで面倒みる必要はないんじゃないの。TOEFLで何点か取れば単位でいいんじゃない」というもっともな意見も全体討論で出て、タジタジでした。でも自分が北大出身ってこともあり、北大生のだらしなさ・自主性のなさを知っているんだよね。おっと、それじゃダメだから、何とかいい教育を受けてもらうにはどうしたらいいかを考えるために集まっているんでした。反省。

こういったアイディアは具体的なものにしていく必要があります、それが1日目の午後のワークショップでした。私たちのグループは「国際貢献プログラム」を含めた興

味深いカリキュラムを提案しましたが、本間研究科長に「いくらお金がかかるの？」と質問され、ぎゃふん。でも、いいアイディアだと思うけどなぁ。

ほろ酔いディベートでは僕だけ「完全酔っぱらいディベート」になってしまいました。「医学科入学者200名、卒業生100名とするのに賛成か反対か」でしたが、わがチームは負けてしまい、残念。でも、ちょっと切実なネタだよね。

夜の宴会は最初に書いたので省略。でも、本当にこれが一番面白かった。いつもは聞けない話も聞きました（研究科長の若い頃の話とか）。

2日目のワークショップは臨床基礎講義をどうするかがテーマで、これはグループによって面白い傾向がでました。つまりは5年生後半から6年生前半にかけての講義なのですが、その時期に病理学や解剖学をもう1回教えた方がいいというグループ、さらに栄養学、看護学など、今までの講義では教えていなかった講義をというグループ、国家試験対策をするべきだというグループに分かれました。全部やりたい所なんですね。

その後、吉岡副研究科長から北大の入試、医学教育の現状を教えて頂き、医学部入試が理科3科目必要になる

ことなども聞かされ、選抜基準が厳しくなって優秀な学生さんが入ってくるのだろうなと思いました。しかし一方、もうすぐ受験生になる我が子を思い浮かべ、「こりゃうちの子には厳しいなー」という思いも複雑に交錯していました。

兎にも角にも日程は終了し、結構ボリュームのある食事を時間通りにしっかり食べた経験がないため胃が重くなり、帰りのバスに乗り込んだのでした。帰りのバスでは駒大苦小牧が準決勝を戦っているのをTVで見ました。翌日優勝し、その後暴力問題で揺れ大変でしたが、いいチームでしたよね。キャプテンの林君、きっといいヤツなんだろな。北大医学部の教員もまた、いいチームを組んで、いい医者、研究者を育てるべく戦う必要がありますね（キャプテンの本間君、前沢君もいいヤツみたいだし）。私としては、そういういい教育を受けた中の何人かが「いい小児科医」になればいいのにと思っています。おっと、小児科の勧誘になってしましました。でも、そのためにはもっと私たちの教育スキルを上げる事が必要なんですね。ようやくFDの重要性に気付いた私でした。

2005年 医学部医学科オープンユニバーシティと体験入学

医学部医学科・医学研究科アドミッション実施委員会 委員長 渡辺 雅彦
(解剖発生学分野)



北海道大学アドミッションセンターが全体方針を立て、これに沿った形で各学部・学科のアドミッション実施委員会が企画・実施する形で、毎年夏にオープンユニバーシティと体験入学が開催されている。本年度は、腫瘍外科学分野の近藤哲教授が8月1日（月）開催のオープンユニバーシティの責任者として、私が8月2日（火）開催の体験入学の責任者として、従来の企画内容に変更や工夫を加える形で行った。

今年のオープンユニバーシティには、午前に102名／

午後110名で合計212名と、昨年を50名程越える多数の参加者があった。近藤教授の司会の下、本間研一医学部長の挨拶、医学部紹介ビデオの映写、医学部・大学病院での教育・研究・診療の現場見学、質疑応答からなる2時間10分の企画として行った。今年の大きな変更点の1つは、これまで参加した高校生やその保護者の方々は割り振られた1つの分野を訪問見学するだけであったが、今回は14~16名からなる7つのグループに分け、教育施設（解剖学実習室）、研究施設（医歯学総合研究棟のオープンラボ、fMRI室、電子顕微鏡室）、診療施設（CT検査室、検査部、病理部）の3部門7カ所を順に見学し、訪問先で待ち受ける担当者の説明を受けるようにしたことである。もう一つの変更点は、オープンユニバーシティに5・6年次の医学部生有志6名も加わり、訪問見学の引率や質疑応答に参加してもらったことである。これらの変更は大きな効果を生んだようで、見学後に臨床大講堂に帰ってきた高校生等の表情が明るく生き生きしており、質疑応答も活発で、特に医学部生に対して大学生活や医学部に関する率直な質問も相次ぎ、高校生と医学部生と教員とが愉快なキャッチボールをするような雰囲気となった。



翌日の体験入学は、これまでの経験豊かな教授の講義のみの形式から、「高校生のための脳科学」と銘打って、医学部生が最初に味わう解剖学の講義と実習を高校生が体験するという形式に変えてみた。当日は、50名の高校生と1名の高校の生物教諭が参加した。本間医学部長の挨拶の後、私が脳に関する講義を30分程行い、その後人体骨格標本・ヒト脳標本・動物の脳標本・プレパラート検鏡など、自分の手で触り、自分の目で観察する実習を行った。約1時間の実習には、解剖学系3分野の教員と大学院生と医学部学生が立ち会い、脳や人体の構造に関する質問や、北大や医学部に関する質問等、元気な高校生に応対した。

両日とも札幌としては暑い、多少消耗するような夏の日であった。しかし、いずれの企画においても、企画の終了後まで北大医学部に関する熱心な質問が続き、「絶対、北大に入学したい」と残していった声に、これまでの準備や用意の苦労も一瞬にして昇華したような気持ち

になった。来年度のオープンユニバーシティ及び体験入学に関して、ご意見・ご要望などを最寄りの医学部医学科・医学研究科アドミッション実施委員会委員にお寄せいただきたく、よりよい企画を目指したい。

最後に、オープンユニバーシティで丁寧に現場説明していただいた玉木長良教授、伊藤智雄講師、秋山真志講師、鈴木春樹副技師長、中村秀樹技術職員、宮本環さん、寺尾敦さん、引率・説明していただいたアドミッション実施委員会の各委員と医学生の中嶋朝子さん、広瀬貴行君、嶋田和浩君、吉田美穂さん、高瀬ふみさん、渡辺美佳さん、質疑応答に参加していただいた寺沢浩一教授と藤田博美教授、体験入学の準備と応対をしていただいた岩永敏彦教授、神谷温之教授はじめ解剖学教室のメンバー、これらの企画全般の設計と運営に奔走していただいた今野康二係長と山本透主任はじめ医学部教務係の方々に、厚く御礼を申し上げたい。

医学部医学科・医学研究科アドミッション実施委員会
委員長 渡邊 雅彦（解剖発生学分野）
副委員長 近藤 哲（腫瘍外科学分野）
委員 高野廣子（組織細胞学分野）
“ 村下十志文（解剖発生学分野）
“ 吉岡充弘（神経薬理学分野）
“ 清水 宏（皮膚科学分野）
“ 野々村克也（腎泌尿器外科学分野）
“ 高山千利（分子解剖学分野）
“ 小橋元（老年保健医学分野）
“ 白土博樹（大学病院 放射線部）
(協力委員) 渡邊智（法医学分野）

医学部保健学科オープンユニバーシティ・体験入学のご報告

理学療法学専攻 高橋光彦

保健学科のOUは午前158名、午後144名の計302名もの参加があり、昨年の人数を大きく上回りました。考えていた以上の人数でうれしい悲鳴があがり、資料があつと言う間になくなり、再度のコピーも事務方の皆様の臨機応変の対応で事無きを得ました。今年のプログラムの特徴は、複数の専攻を回り易くすることと、より各専攻の内容が理解できるように、各専攻30分のコースをそれぞれ3つ設定し、各コース間に移動時間10分を設け、プログラム時間を統一したことです。9時半開始、立ち見が出て、父兄もちろんの3・1教室で、松野学科長の挨拶と9/3日の保健学科主催の市民公開講座のアンケート、続いて小林教務委員長の全体説明が終わると各コースへ移動開始。看護学専攻の「体位変換の技術：自然な

生活動作を生かした体位変換」「出産について：新生児の抱っこ・妊婦体験をしよう」「感染予防の技術：手洗いを見直す」を始めとして、各専攻それぞれに3つのコースが午前・午後に実施されました。参加者は熱心に各専攻で説明を聞き、質疑を行っていました。また、専攻間の移動も行われ希望者は複数の専攻を訪問できました。

体験入学の各専攻への参加者は看護20名、放射9名、検査23名、理学22名、作業9名の計83名でした。前日のOUへの参加を訪ねたところ、全体の1/3ほどが挙手し、各専攻へのモチベーションの高さが伺えました。各専攻では、専攻の説明、公開講義、体験学習、ビデオ上映、展示、病院見学も含んだ特色ある2時間のプログラムが同時進行しました。

参加者からいただいたアンケートにはつぎのようなご意見が寄せられました。興味のある専攻が複数あっても全部見学することができたのでよかったです。内容も具体的なもので大変参考になった。今までやったことがなかったことばかりで、より医療に対して興味がわいた。おもしろかったが、時間が足りなかった。もう少し体験学習の内容を充実させてほしい。熱心に説明してくれた。フィルムを見るのが楽しかった。北大に行きたい気持ちがUPした。短時間でもいろいろ体験できたので楽しかった。以前よりももっと検査技術に興味をもつことができてよかったです。病院も見られたし、授業の雰囲気も味わえるのでよかったです。ホームページなどでわからなかつたことがわかつてよかったです。頂いた多くの意見を来年度に生かし、北大を目指す学生の目的意識があがればうれしい限りです。



第48回（平成17年度）東日本医科学生総合体育大会（夏季部門）

医学科3年 小幡景太
(東医体評議員)

第48回東日本医科学生総合体育大会（夏季部門）が埼玉医科大学、群馬大学医学部、順天堂大学医学部、日本大学医学部の4大学が主管校となり7月下旬から8月上旬に開催されました。

本学からは14団体が出場し、バスケットボール（男子）が3連覇の偉業を達成いたしました。参加団体の主な成績は次のとおりです。

ソフトテニス（女子）	準優勝
サッカー	3位
ボート	3位

なお、冬季部門はアイスホッケーが12月下旬に軽井沢スケートセンターで、スキーが3月中旬にたざわ湖スキー場で、それぞれ開催される予定です。



お知らせ

◆ 教務関係の主な行事予定 ◆

◇医学部医学科

卒業試験日程

今年度の卒業試験は、9月6日(月)～11月11日(金)の日程で、医学部図書館3階特別会議室において実施されております。なお、卒業認定は平成18年2月9日(木)開催の医学科会議で決定され、翌10日(金)掲示により発表する予定です。

平成18年度学士編入学試験結果について

平成18年度医学科学士編入学試験（募集人員5人）について、7月27日(水)第1時選抜試験、8月18日(木)実施の第2次選抜試験を経て、9月2日(金)に最終合格者5人を発表し、合格者全員入学手続きを完了いたしました。

志願者	239人（男149人、女90人）
第1次選抜受験者	219人（男136人、女83人）
“合格者”	34人（男27人、女7人）
第2次選抜受験者	33人（男27人、女6人）
最終合格者	5人（男5人）

第100回医師国家試験について

来春2月に実施される第100回医師国家試験の日程が7月1日付けの官報により次のとおり公表されました。

出願期間	平成17年12月7日(水)～26日(月)
試験日	平成18年2月18日(土)、19日(日)・20日(月)
合格発表日	平成18年3月29日(水)午後2時

なお、これまで願書等の書類の提出については、学生個々が北海道厚生局に直接提出しておりましたが、卒業見込み者については、可能な限り大学で取りまとめて提出するよう北海道厚生局から要請があり、今回の医師国家試験から教務係で願書等取りまとめの上、一括して提出する予定です。具体的な日程・方法等については、決定次第お知らせいたしますので、受験予定者にあっては提出期限の厳守等、ご協力をお願いします。

◇医学部保健学科

3年次編入学試験結果について

第1回目となる3年次編入学試験が8月27日(土)実施され、9月16日(金)合格者20人が発表されました。なお、入学手続き期間は9月28日(水)～30日(金)で辞退者があった場合は、順次追加合格者を発表する予定です。

専攻名	募集人員	志願者	受験者	合格者
看護学	10	20	19	10
放射線技術科学	3	10	10	5
検査技術科学	3	9	9	5
理学療法学	2	6	6	2
作業療法学	2	4	4	4

◇大学院

大学院医学研究科（博士課程）入学試験

平成18年度の入学試験は、前期試験および後期試験の2回に分けて実施されております。

	出願期間	試験日	合格発表
前期試験	平成17年8月1日から 平成17年8月8日まで	平成17年9月7日	平成17年9月16日
後期試験	平成17年12月12日から 平成17年12月19日まで	平成18年2月1日	平成18年2月24日

前期試験入試データ

志願者数 23人（男16人、女7人）

受験者数 23人（男16人、女7人）

合格者数 21人（男15人、女6人）

大学院医学研究科医科学専攻（修士課程）入学試験

平成18年度の入学試験は、下記の通り実施されました。

出願期間	試験日	合格発表
平成17年7月25日から 平成17年8月1日まで	平成17年9月5日	平成17年9月16日

入試データ

志願者数 44人（男30人、女14人）

受験者数 40人（男27人、女13人）

合格者数 35人（男24人、女11人）

◆ 平成17年度科学研究費補助金採択状況 ◆

医学研究科

金額単位：千円

	15年度		16年度		17年度		備 考
	件 数	交付金額	件 数	交付金額	件 数	交付金額	
特定領域研究	9	50,300	12	74,900	15	124,800	
基盤研究（S）	2	49,400	2	33,200	3	64,350	
基盤研究（A）	4	37,400	3	45,400	3	49,010	
基盤研究（B）	38	164,500	36	180,600	33	178,900	
基盤研究（C）	21	37,800	20	27,711	20	36,700	
萌芽研究	18	37,800	23	39,700	32	51,400	
若手研究（A）					2	19,890	
若手研究（B）	8	13,299	8	15,500	10	16,300	
計	100	390,499	104	417,011	118	541,350	
採択率 (新規・継続を含む)	40.6%		47.3%		44.7%		

医学部

金額単位：千円

	15年度		16年度		17年度		備 考
	件 数	交付金額	件 数	交付金額	件 数	交付金額	
特定領域研究							
基盤研究（S）							
基盤研究（A）					1	20,410	
基盤研究（B）	3	10,100	3	12,400	4	15,200	
基盤研究（C）	6	9,600	7	8,500	6	9,200	
萌芽研究	2	4,100	3	4,100	2	1,600	
若手研究（A）							
若手研究（B）	3	3,200	5	4,500	3	2,421	
計	14	27,000	18	29,500	16	48,831	
採択率 (新規・継続を含む)	26.5%		34.6%		29.1%		

◆ 内規・要項制定のお知らせ ◆

○北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の顕彰に関する内規

(趣旨)

第1条 この内規は、北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科（以下「医学研究科」という。）の教職員・学生等の顕彰に関し、必要な事項を定めるものとする。

(顕著な業績をあげた者に対する賞)

第2条 医学研究科長及び医学科長（以下「医学研究科長」という。）は、研究・教育等に関し、顕著な功績等のあった教職員・学生等を顕彰することができる。

2 顕彰の種類及び対象者は次の各号に掲げるとおりとする。

(1) 優秀研究賞

顕著な研究業績をあげた専任教職員

(2) 優秀教育賞

顕著な教育業績をあげた専任教職員

(3) 優秀論文賞

特に優れた論文を発表した専任教職員・学生等

(4) 特別賞

医学研究科、国内又は国際社会に顕著な貢献をした専任教職員・同窓生

3 前項各号の顕彰は表彰状をもって行い、副賞として奨励金又は記念品を贈ることができる。

(寄附者、長年勤続者等に対する感謝状)

第3条 医学研究科長は、寄附者、長年にわたって非常勤講師等として勤続した者及び特に必要と認められた者に対し、感謝状を贈ることができる。

(雑則)

第4条 この内規の実施に関し必要な事項は、医学研究科長が別に定める。

附 則

この内規は、平成17年6月23日から施行する。

○北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科教職員・学生等の諭旨等の措置に関する内規

(趣旨)

第1条 この内規は、北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科（以下「医学研究科」という。）の教職員・学生等の諭旨等の措置に関し、必要な事項を定めるものとする。

(諭旨等の措置)

第2条 医学研究科長及び医学科長（以下「医学研究科長」という。）は、国立大学法人北海道大学職員就業規則（平成16年海大達第85号）、北海道大学通則（平成7年海大達第2号）及び北海道大学大学院通則（昭和29年海大達第3号）等、本学の諸規則に基づく懲戒並びに訓告等の措置等に該当するに至らない者に対して、その本分に反しないように注意を喚起する必要があるときは、次の措置を行うことができる

(1) 諭旨

(2) 注意

(3) 厳重注意

2 前項の措置は、口頭又は文書で行う。

(調査及び教授会等への報告)

第3条 諭旨等の措置は、教職員にあっては、医学研究科長の指名する教授等若干名で構成する調査委員会の、学生等にあっては、研究科教務委員会又は学部教務委員会の調査結果を踏まえて行う。

2 医学研究科長は、諭旨等の措置を行ったときは、医学研究科教授会又は医学科会議に報告する。

附 則

この内規は、平成17年6月23日から施行する。

○医学研究科・医学部医学科におけるハラスメント防止等に関する要項

平成17年7月6日

医 学 研 究 科 長 裁 定

(趣旨)

第1 条 この要項は、医学研究科・医学部医学科（以下「医学研究科」という。）におけるハラスメントの防止及びハラスメントに対応するための措置等に關し、必要な事項を定めるものとする。

(研究科長の任務)

第2 医学研究科長・医学部医学科長（以下「研究科長」という。）は、医学研究科におけるハラスメントの防止等に努めるとともに、第3に規定する防止委員会からのハラスメントに対する措置勧告等に基づき、必要な措置をとるものとする。

(防止委員会)

第3 医学研究科に、ハラスメントの防止等に関する諸施策を実施するため、医学研究科・医学部医学科ハラスメント防止委員会（以下「防止委員会」という。）を置き、次に掲げる業務を行う。

(1) ハラスメントの防止等に係る啓発活動に關すること。

(2) ハラスメントに起因する問題に係る教職員、学生に対する必要な措置等を研究科長に勧告すること。

(3) 相談者に対し、相談のあった事項に係る対応状況、調査の経過等を通知すること、及び相談のあった事項について、研究科長が必要な措置等を行った場合は、その結果を通知すること。

2 防止委員会は、副研究科長、医学研究科教務委員会委員長、医学部医学科教務委員会委員長及び事務長をもって組織する。

3 防止委員会に委員長を置き、研究科長が指名する副研究科長をもって充てる。

(相談員)

第4 医学研究科に、ハラスメントに關する苦情の申出及び相談（以下「相談」という。）に対応するため、ハラスメント相談員（以下「相談員」という。）を置き、当該相談員は、次に掲げる業務を行う。

- (1) 苦情・相談を受け付けること。
 - (2) 前号の苦情・相談の内容を第3に規定する防止委員会に報告すること。
- 2 相談員は、教授、助教授・講師、助手及び事務部職員のうちから若干名を研究科長が委嘱する。
- 3 相談員の任期は、1年とし、再任されることができる。

(調査委員会)

- 第5 防止委員会は、ハラスメントに起因する問題について、事実関係を調査するため医学研究科・医学部医学科ハラスメント調査委員会（以下「調査委員会」という。）を置くことができる。
- 2 調査委員会は、事実関係を調査し、その結果を防止委員会に報告する。
- 3 調査委員会委員は、研究科長が委嘱する。
- 4 調査委員会に委員長を置き、委員のうちから研究科長の指名する者をもって充てる。
- 5 防止委員会委員長は、当該ハラスメントに起因する問題が解決したときは、調査委員会を解散するものとする。

(守秘義務)

- 第6 ハラスメントに起因する問題に携わる者は、当事

者のプライバシーの保護に配慮するとともに、任務遂行上知り得た秘密を漏らしてはならない。その任務を退いた後も、同様とする。

(不利益取扱いの禁止)

- 第7 ハラスメントに対する苦情・相談、当該苦情・相談に係る調査への協力、その他ハラスメントに関する正当な対応をした者に対して、そのことをもって不利益な取扱いをしてはならない。

(庶務)

- 第8 防止委員会及び調査委員会に関する庶務は、事務部人事係が処理する。

(雑則)

- 第9 この要項に定めるもののほか、ハラスメントの防止等に関し必要な事項は、研究科長が別に定める。

附 記

- 1 この要項は、平成17年7月6日から実施する。
- 2 この要項の施行後、最初に委嘱される相談員の任期は、第4の3項の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。

○北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金要項

(目的)

- 第1条 北海道大学大学院医学研究科・医学部医学科音羽博次奨学基金（以下「基金」という。）は、医学研究科・医学部医学科の学生及び外国人留学生（以下「学生」という。）に奨学金を授与することを目的とする。

(奨学金授与の対象)

- 第2条 基金は、音羽博次氏からの寄附金を原資とし、奨学金授与の対象は、学業・人物とともに優秀な学生とする。

(選考)

- 第3条 奨学金を授与される者の選考は、医学研究科長・

医学部医学科長が指名する専任教師で構成する選考委員会が行う。

(管理及び事務)

- 第4条 基金の管理は、事務局財務部で、選考等に関する事務は医学研究科・医学部事務部が行う。

(雑則)

- 第5条 この要項に定めるもののほか、基金の運用に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

この要項は、平成17年7月14日から実施する。

◆ 平成18年開催学会等のお知らせ ◆

平成18年開催学会等一覧

学会名	担当分野名	開催年月日	開催場所	トピックや目的
第18回代用臓器・再生医学研究会	遺伝子病制御研究所・免疫制御分野	1月13日(金)	北海道大学学術交流会館	近年、バイオサイエンスとナノテクノロジーの進歩はめざましくその社会への具体的還元のひとつとしてバイオ新素材、ナノテクノロジーを駆使した人工組織、人工臓器の開発、再生医療への応用が上げられる。我々遺伝子病制御研究所・免疫制御分野ではこれまでに免疫系の解析、人為的制御法の開発を通じて再生医療の発展に貢献してきたが、他にも北海道地域の学術・研究機関では細胞外マトリックス研究による人工韌帯の開発、ナノテクノロジーを用いた生命現象の分子レベルでの機構・構造解明技術等、人工臓器・再生医療開発に直結する高いレベルを誇る研究が多く存在している。本シンポジウムは我が国における人工臓器、再生医療の先端的な話題の結集を目指し、特に北海道地域における人工臓器・再生医学研究体制のプロモーションを目的としている。昨年Nature Biotechnology誌に人工リンパ節開発の論文を発表された理化学研究所の渡邊武先生に特別講演を行っていただき、本学と理化学研究所との共同研究のプロジェクトについても協議する。本シンポジウムを通じて人工臓器・再生医学研究の現状認識、問題点の把握を行うと共に将来への発展の可能性を探り、研究者間の情報交換さらには今後の共同研究、協力体制の確立に資する。
第78回日本神経学会北海道地方会	神経内科学分野	3月11日(土)	北海道大学医学部臨床大講堂	日本神経学会の目的に協力し、本地区における神経学の普及・発展と神経疾患における問題の究明を期し、あわせて会員相互の親睦をはかることを目的とする。
2005年度日本神経学会北海道地区生涯教育講演会	神経内科学分野	3月12日(日)	北海道大学医学部臨床大講堂	
第34回日本小児神経外科学会	脳神経外科学分野	5月31日(水) ～6月2日(金)	北海道大学学術交流会館	
第10回基盤的癌免疫研究会総会	遺伝子病制御研究所・免疫制御分野	7月13日(木) ～14日(金)	札幌コンベンションセンター	近年、医学、生物学の様々な領域の発展の恩恵を受け、癌免疫の分子基盤がヒトのレベルでも解明され始めた。特に1990年代より癌抗原の遺伝子と抗原ペプチドが同定され始め、その臨床応用が試みられた。基盤的癌免疫研究会はこのような癌免疫研究の急速な進歩を踏まえ、我が国的第一線の癌免疫研究者に議論の場を提供し、情報の活発な交換を行い国際的にも高く評価される研究成果を生み出しその臨床応用を推進する基盤を作ることを趣旨として平成9年に設立され、これまで9回の会議を開催し癌免疫研究の発展に貢献してきた。この間に癌抗原ペプチドを用いた臨床試験が国外のみならず国内に於いても実施され、癌抗原特異的な免疫応答を誘起できることが示されてきたが、残念ながらまだ満足できる臨床効果が得られることは稀である。この困難さの克服には臨床試験、基礎癌免疫研究の両面のさらなる推進が不可欠である。この重要な時期に札幌に於て節目となる第10回総会を開催し、真に有効な癌ワクチンの開発を通して社会貢献するべく国内外より第一線の研究者が集う。

学会名	担当分野名	開催年月日	開催場所	トピックや目的
第16回日本呼吸管理学会学術集会	保健学科理学療法学専攻臨床理学療法学講座 障害代償学分野	7月28日(金) ～29日(土)	札幌コンベンションセンター	新しいチーム医療をめざして：本学会は呼吸ケアの基礎ならびに臨床に関して、その進歩発展と普及に寄与することを目的に設立され、医師、看護師、理学療法士、作業療法士、呼吸療法士、臨床検査技師、栄養士、ソーシャルワーカーなど呼吸管理に関わるすべての職種が集まり、学術発表します。毎年1000人を超える会員が参加します。今回は「新しいチーム医療をめざして」を主題に一般演題、特別講演、シンポジウムなどを予定しています。また、学会が編集する「酸素療法ガイドライン」と「呼吸リハビリテーションマニュアル－患者教育と栄養管理－」の発表もあわせて行います。
第24回日本脳腫瘍学会	脳神経外科学分野	10月1日(日)～3日(火)	北海道阿寒郡阿寒湖温泉ニュー阿寒ホテル	
第58回日本気管食道科学会総会・学術講演会	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野	10月5日(木)～6日(金)	ロイトン札幌	気管食道科学領域における学術的交流をはかる
第15回日本リウマチ学会北海道・東北支部学術総会	整形外科学分野	11月24日 (金)～25日(土)	北海道大学学術交流会館	2日にわたりて2-3題の特別講演、シンポジウム、一般演題100題のプログラムをとおして、リウマチ学に興味を持つ内科、整形外科、リハビリテーション医学、病理など専門を異にする会員が一同に会して、活発なディスカッションと交流の場となっております。同時に一般研修医や若手医師のための教育プログラムを取り入れ、検査技師や理学療法士等のコメディカルスタッフも多く参加していただいて、現在のリウマチ疾患診療の問題点について、さまざまな角度から議論がなされるユニークな会となっております。
5 th International Congress on Autoimmunity	免疫・代謝内科学分野・大学病院第二内科	11月29日(水) ～12月3日(日)	Sorrento, Italy	2年に一度開かれている国際自己免疫会議、世界中からこの分野の専門家が多数集まる。小池隆夫(免疫・代謝内科学分野)とPL Meroni (Italy), Y Shoenfeld (Israel)の三人がCo-chairmenです。AUTOIMMUNITY CONGRESS 2006: http://www.kenes.com/autoim2006/

編集後記

本年度第2号となる医学部広報26号をお届けします。今回は医学展、医系大運動会、教育ワークショップ、オープン・ユニバーシティ、東医体等々、学生活動や学生教育に関連した記事を多く載せています。また、お知らせコーナーでも教務関係の行事予定や医学研究科・医学部内規の制定に関する記事が中心です。日頃このような活動や行事に直接かかわってはいない職員の方々もご一読いただると医学部の活動の一端がみえてくるのではないでしょうか。

さて、独立法人化2年目を迎えて、本格的な大学改革の流れが始まる予感を感じさせる今日この頃です。総合大学である北海道大学は大学本部の強いリーダーシップのもとに予算の流れや人事に関する新しい方向性が示されています。医学部がその中でどのようにその存在意義を主張するか、どのようにして改革の主体となりうるかが問われています。編集委員の一人として今後は大学改革の具体的な流れについてもこの広報で取り上げていきたいと考えています。皆様のご意見、ご要望をお待ちしております。(西村正治)

— Home Page のご案内 —

医学部広報は

<http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html>

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発 行	北海道大学医学研究科広報編集委員会 060-8638 札幌市北区北15条西7丁目
連絡先	医学部庶務係 電話 011-706-5003
編集委員	神谷 温之、西村 正治、高橋 光彦 石津 明洋、小橋 元、佐藤 松治